法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-04-30

# 越境者が辿り着いたブエノスアイレス : アンナ=カズミ・スタールの作品に見られる重層的アイデンティティの考察

高木, 佳奈 / Takaki, Kana

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化. 論文編 / 異文化. 論文編
(巻 / Volume)
14
(開始ページ / Start Page)
33
(終了ページ / End Page)
57
(発行年 / Year)
2013-04
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008693

Hosei University Repository

# 越境者が辿り着いたブエノスアイレス
## ――アンナ=カズミ・スタールの作品に見られる重層的アイデンティティの考察――

東京外国語大学博士前期課程
高木 佳奈
TAKAKI Kana

### 1. はじめに

本稿で取り上げるアンナ＝カズミ・スタール（Anna-Kazumi Stahl）は、ドイツ系米国人の父親と日本人の母親を持つ日系二世の作家である。米国南部で生まれ育った彼女は、自らの意思でブエノスアイレスに移住し、20代を過ぎてから習得したスペイン語で小説を発表している。外国語で執筆を行う作家は珍しくはないが、スタールの場合、日本語でもドイツ語でもなく、全く馴染みのなかったスペイン語に切り替えたことによって初めてエスニシティとアイデンティティの問題を描くことが出来たという点が興味深い。日系人というエスニック・マイノリティとして米国で生まれ育った彼女が、米国とは異なる歴史を歩んだブエノスアイレスの日系社会を描く上で、スペイン語による制限された表現と外国人特有のアクセントが移民社会を表現することを可能にしたのである。スタールの作品に描かれた二つの日系社会を比較することは、多様化する日系文学[1]を再考する上で重要である。

日本人の海外移住から一世紀以上の長い時間が経ち、日本と移住先の二つの文化を受け継いだ二世、三世による文学作品が数多く生まれている。しかし日系文学というとこれまでその中心は北米[2]であり、とりわけジョン・オカダ、ジャニス・ミリキタニ、ジョイ・コガワと

Hosei University Repository

いった第二次大戦中の強制収容を扱った英語の作品が多く取り上げられてきた。親の祖国と母国が敵味方に分かれて戦い、信じていた母国に強制収容という形で裏切られたことは、日系社会に大きな傷跡を残した。戦後60年以上が経ち、三世、四世が中心の時代になると、日系文学のテーマも多様化してきている。小林富久子は従来の日系文学を主に三つのグループに分類できる（①一世、二世の世代間の対立、②一世夫婦におけるジェンダーの問題、③大戦中の強制収容体験について）とした上で、近年登場した日系文学の新しい潮流について紹介している。小林がここで名前を挙げているのはシンシア・カドハタ、ヴェリナ・ハス・ヒューストン、カレン・テイ・ヤマシタである[3]。

スタールもまた、北米日系文学の伝統を踏まえながら新たな日系文学を目指した新しい世代の一人であるが、彼女の作品はアルゼンチンで出版され、スペイン語で書かれているために日本ではまだほとんど紹介されていない。近年ようやくブラジルやアルゼンチンといった南米に渡った日系人の文芸活動が研究されるようになったが[4]、スタールは日系米国人でありながらスペイン語で執筆をするという、いくつもの境界を超えた存在であるがために、日系文学においても、またラテンアメリカ文学においても、まだあまり研究されていないのが現状である。

そこで本稿ではスタールを「日系アルゼンチン文学」の文脈で取り上げ、日系人としての視点から、様々なエスニシティが存在するブエノスアイレスをスタールがどのように描いているかを探る。『自然災害』（*Catástrofes Naturales*, 1997）及び『一日だけの花』（Flores de un solo día, 2002）の二作品と筆者が行ったインタビューから、外国語であるスペイン語で執筆することによって表現し得た文体と、それによって描かれる移民社会を分析する。また彼女のような多言語作家が、アルゼンチン文学界でどのように受け止められているのかを考察する。

Hosei University Repository

## 2. スタールの経歴

### 2-1. 越境者となるべくして生まれたスタール

スタールの詳しい経歴を紹介する前に、Anna-Kazumi Stahl という名前を見て想像してみてほしい。英語、日本語、ドイツ語が混在する複雑な名前だが、彼女は一体どんなバックグラウンドを持つ人間なのだろうか。

スタールは 1963 年にドイツ系米国人の父親と、日本人の母親の間に生まれた。ニューオーリンズで二つの文化を行き来しながら育った彼女は、多文化共生の可能性を文学に求め、カリフォルニア大学バークレー校で比較文学を専攻し、後に博士号を取得した。ドイツへの留学や日本での短期滞在を経験した後、88 年に初めてアルゼンチンを訪れたのをきっかけにスペイン語の勉強をはじめ、95 年から本格的にブエノスアイレスに移り住んでいる。97 年に処女短篇集『自然災害』を発表して以来、スペイン語による執筆を続け、2002 年には初の長編小説『一日だけの花』を出版した。この作品はアルゼンチンでの出版後、イタリア語、フランス語に翻訳されている。現在はニューヨーク大学ブエノスアイレス校で教鞭をとる傍ら、ブエノスアイレス・ラテンアメリカ美術館（MALBA）などで日本文学の講座も受け持っている。

米国における日系人というエスニック・マイノリティとして生まれただけでなく、白人男性と日本人女性の間に生まれた「混血」であるスタールは、コミュニティ、国家、人種、言語といった、様々な境界を越える存在だった。そんな彼女がなぜ、縁もゆかりもなかったブエノスアイレスに辿り着いたのだろうか。そしてなぜ外国語であるスペイン語で執筆を始めたのだろうか。その答えは、彼女が形成してきた重層的アイデンティティにある。人種差別の激しかった 60 年代の米国南部に生まれ、日系社会にも完全に同化することのできなかったスタールは、「自分は何者か」、「自分はどこから来たのか」という問い

Hosei University Repository

を胸に、自分の居場所を探し続けていた。そして偶然出会ったブエノスアイレスに、移民たちのオアシスともいえる、理想像を見出したのだった。

彼女はこの世に生まれ落ちたその瞬間から、越境者となるべくして運命づけられていたのではないだろうか。作品に描かれた日系人としての米国での経験は、これまであまり語られてこなかった、戦争花嫁や混血児の視点で語られる。彼らは、周縁に位置する日系社会においても、周縁的な存在だった。スタールは社会が個人のアイデンティティに及ぼす影響についてフィクションを用いて描いているが、そこには彼女自身の経験が活かされていると推測できる。作品に投影されたスタールの重層的アイデンティティはどのように築かれていったのだろうか。

まずスタール自身のバイオグラフィーを追いながら、作品に描かれた米国、アルゼンチン社会の比較を行い、そこに表れているエスニシティの問題を明らかにしたい。日系人としてのエスニック・アイデンティティは常に重要な役割を果たしているが、なぜスタールはアルゼンチンへの移住後も日系人としてのアイデンティティを固持し続けるのだろうか。彼女のエスニック・アイデンティティの芽生えはどのように起こったのだろうか。

### 2-2. 日系米国人に生まれて

日系人はモデル・マイノリティと呼ばれてきたが、それは彼らが米国社会に「同化」するために必死に努力してきた結果であると言えるだろう。日系人をはじめ米国に到着した移民たちが「同化」すべきと考えられた米国文化とは、ハンチントンが述べているように、入植者たちがイギリスから持ち込んだアングロ - プロテスタントの文化だった[5]。その後の移民の大量流入に伴い人口統計上では圧倒的多数派ではなくなった彼らの文化が、米国のナショナル・アイデンティティと

Hosei University Repository

されたのである。

ここで改めてアイデンティティについて考えてみたい。人は所属する文化や社会にかかわる複数のアイデンティティを持つことができるが、それらが矛盾することがある。日本と米国が戦争状態にあったとき、「日本人」であると同時に「米国人」であることは許されなかった。とはいえ、二つの文化の間で悩んだ末「米国人」としてのアイデンティティを優先させたとしても、生まれ持った容姿や文化的背景を捨て去ることはできない。完璧な英語を話し、他の米国人と同じような生活を送っていたとしても、つまり完全な「同化」を達成したとしても、主要社会から拒否されてしまうことが多かった。

スタールはドイツ系米国人の父親と日本人の母親の間に生まれた。血筋から言ってもハイブリッドな存在であり、両親からそれぞれの文化を受け継いでいるが、言語と文化の多くは人生の大半を過ごした米国に負っている。だが、米国社会は彼女を身体的特徴から「日本人」とみなした。父方から主要社会の文化を受け継いでいるにもかかわらず、彼女はマイノリティの一員だったのである。『一日だけの花』の主人公エメ[6]は、ニューオーリンズの名家に生まれながら、使用人の黒人女性ベスや、日本人の母親ハナコにより親近感を抱いていたと語っている。一つの家の中にも人種的区分は存在し、幼いエメも敏感にそれを感じ取っているのである。

> En definitiva, aunque tuviera uno de los apellidos ilustres de la sociedad de Nueva Orleáns, y aunque viviera en el barrio de las grandes mansiones, Aimeé se identificaba más con Bess— aunque fuera negra e hiciera prácticas vudú— y con Hanako— aunque fuera una inmigrante japonesa, muda— que con sus vecinos o con sus compañeritos del colegio.[7]

結局のところ、ニューオーリンズの由緒正しい苗字を持ち、高級

Hosei University Repository

> 住宅街に住んでいたにもかかわらず、エメは近所の人々や学校の友達よりもベス――黒人女性でブードゥー教徒であっても――やハナコ――日本人移民で、口がきけなくても――により親近感を感じていた。[8]

スタールが生まれたのは1964年の公民権法制定の一年前のことである。日系人は有色人種というだけでなく、第二次世界大戦における「敵性国人」というイメージを引きずっており、激しい差別にさらされていた。日系人が米国に忠誠を誓い、二世部隊が犠牲を払って勝利に貢献しようとも、日系人は「日本人」であり、“Jap”だった。特にスタールが生まれ育った南部は歴史的に人種差別が激しい土地であり、日系人も少なかった。スタールは公民権法が制定され法的には平等が認められた後も、日系人として、被差別階級として幼少時代を過ごしたことを語っている[9]。また『一日だけの花』では主人公の母ハナコという日本人女性が戦争花嫁として渡米しているが、結婚後何年もたってから、彼女のことをよく思わない姑に、異人種間結婚禁止法を根拠に結婚は無効であると訴えられる。この法律がルイジアナ州で廃止されたのは67年のことであり、スタールの幼少期にはまだ存在していたのである。

スタールの作品の主人公の多くは、日本人、もしくは日系人である。彼女の重層的アイデンティティの中でも、「日系人」としてのアイデンティティは、ひときわ重要なものである。それは、一世である母親との緊密な関係が当然影響していると考えられるが、自分で日本人の血を意識するというよりも、社会から張られたレッテルによって意識させられ、「日系米国人」としてのアイデンティティを形成していったのではないだろうか。

スタールが被差別体験をきっかけにアイデンティティの探求に向かったことは、他の日系文学作品を読むとよりよく理解できる。山根

Hosei University Repository

和代が述べているように[10]、米国市民権を持っていたにもかかわらず強制収容所に入れられた二世たちは、「自分は何人なのか？」と自問するようになった。しかし米国政府の戦略により二者択一を迫られた[11]彼らの態度は一様ではなかった。坂口博一は、日系人としてのアイデンティティに対する日系作家の態度を①人種差別に真っ向から抗議するジョン・オカダタイプ。②人種差別を受け入れた上で柔軟な振る舞いによって白人社会に溶け込むモニカ・ソネタイプ。③日本を知ることで日系人としてのアイデンティティに誇りを持つに至るヨシコ・ウチダタイプ。に分類している[12]。

スタールの場合、強制収容という日系人が歩んだ歴史上最も屈辱的な被差別体験を経験することはなかったが、白人社会からの拒絶が彼女に日系人としてのアイデンティティを意識させた点では同じだと言える。坂口の分類に従えば、日本に数か月滞在し、積極的に日本文学に親しんできたスタールは③のタイプだと言える。しかし彼女の場合、混血であったため、完全に日系社会に溶け込むこともできなかった。彼女の母親は戦後に移住した花嫁移民である。安富成良は日本で築き上げられた「戦争花嫁＝パンパン」というステレオタイプが米国の日系社会にもそのまま定着し、また戦前の移民たちとの価値観の違いから、同じ一世であっても両者の間に壁があったことを述べている[13]。

筆者が行ったインタビューでスタールは、学生時代に日系人の学生から差別を受けたことを明かしている。戦時中の強制収容に対する補償を求める日系学生のグループに参加していた際、代表者の男子学生と意見が食い違った。すると彼に「君は混血だからわかるまい」と言われたという。差別と戦うために「日系米国人」としての結束を固める必要に駆られ、その結果新たな差別が生み出されてしまったのだ。こうした経験は、差別や偏見を日系人のようなエスニック・マイノリティの問題に限らず、普遍的な問題として描こうとするスタールの態度に表れている。スタールの作品では白人男性も差別を受けるが、そ

Hosei University Repository

の理由は肌の色ではなく彼の「普通とは異なる」行動にあるのである。スタールは周縁に位置する日系社会においても周縁的存在だった。「人と違う」ことが常に偏見の対象となりうることを知ったスタールは、米国内の人種問題を告発することよりも、誰もが持ちうる偏見や誤解を通して人間関係を描こうとしたのだと考えられる。

日系社会においても窮屈さを感じていたスタールは、両親の祖国である日本やドイツにも滞在したが、そこでも混血であるが故に彼女は異質な存在だった。境界をさまよったスタールが最終的にたどり着いたのは、「世界の果て」、ブエノスアイレスだった。

### 2-2. ブエノスアイレスとの出会い

スタールとブエノスアイレスとの出会いは偶然によるものだったらしい。彼女の関心は常に日系社会にあり、米国からラテンアメリカに対象を移してアジア系移民の研究を続けようとしていた。そこでメキシコへの奨学金を申請したのだが、採用されたのはブエノスアイレスへのプログラムだったのだ。こうして運命のいたずらによってスタールは88年に初めてブエノスアイレスの地を踏む[14]。希望していたメキシコよりもはるかに遠い、未知の土地であり、『一日だけの花』の主人公エメの言葉を借りれば、「別世界（el otro universo）」であり、まさしく「世界の果て（el fin del mundo）」だった[15]。

それではアルゼンチンの日系社会はスタールの目にどのように映ったのだろうか。『一日だけの花』の主人公エメが経営する生花店で働く日系三世ハビエル・ナカムラはステレオタイプ化された日系人として描かれている。

> Japonés de la tercera generación en la Argentina, la personalidad de Javier refleja la reserva, acaso la rigidez de aquella cultura. Cree casi a nivel del fanatismo en el valor del

Hosei University Repository

esfuerzo, entra tempranísmo y trabaja todo el día sin parar; (...) Por supuesto, trata a los clientes con gentileza, con modales correctos, con cortesía. Pero no le interesan. Por eso no recuerda quiénes son, ni siquiera si vienen con mucha frecuencia. (...) Su interés verdadero está en los números, en sacar los balances y ver el panorama del negocio, la rentabilidad, los sectores del mercado vulnerables versus los prometedores, la proyección comercial en general. Eso es "lo importante".[16]

アルゼンチンの日系三世として生まれた彼の性格は、慎重で、厳格ともいえる日本人に典型的なものだった。盲目的に努力の価値を信じ、朝早く出勤して一日中休むことなく働く。[ 中略 ] もちろん顧客には礼儀正しく、その場にふさわしい態度で接する。しかし彼は顧客に興味がない。だからその客がどんな人なのか、お得意様なのかどうかも覚えていない。[ 中略 ] 彼の本当の興味は数字にあった。収支を計算し、事業の展望や収益性を見直し、市場の脆弱な部門と有望な部門を見極め、事業計画を決定する。それこそが「重要なこと」なのである。

その長所も短所も、極めて客観的に描かれて批判的なところは見られない。むしろハビエルの欠点はもう一人の従業員で日本文化に傾倒したアルゼンチン人アリエル（ハビエル同様、意図的にステレオタイプ化されている）とのコミカルな対比のために描かれているといえるだろう。アリエルはおしゃべり好きで、顧客一人一人の名前と苗字を覚えているのは勿論のこと、個人的な悩み事まで熱心に聞いてあげるので、仕事が疎かになってしまうこともしばしばである。それぞれのエスニシティの典型像として描かれるこの対照的な二人の存在は、「同化」が強要される米国社会を批判し、移民たちが祖国の文化を保ちつ

Hosei University Repository

つも、共存できることを主張している。正反対の性格を持つ二人は互いに欠点を補完しあう存在であり、その共存関係は、多文化社会におけるスタールの理想を示しているといえるだろう。

次に、アルゼンチン人の日本人観をスタールがどう描いているか見てみよう。『自然災害』に収められている短編「ある日本人のタンゴの夢」（*Sueño tanguero de un japonés*）には、スペイン語が全くわからない日本人に対して非常に友好的に接するアルゼンチン人のウェイターが登場する。

> El mozo se inclinó más cerca de Toshiuri[17].
> —Usted no es de acá, ¿no? ¿De dónde es? ¿Japonés?
> —Sí —dijo Toshiuri, sintiendo que le salía mucho más fácil de lo que pensaba. Entonces dijo otra vez “Sí”, y el mozo lo miró amistosamente.
> —Yo conozco muchos japoneses por acá —dijo, dejando atrás a Toshiuri que no entendía—. Son muy buenos, muy trabajadores.[18]
> ウェイターはトシウリに近寄った。
> 「あなたはアルゼンチンの方ではありませんね。ご出身はどちらですか？日本？」
> 「ええ」トシウリは思っていたより簡単だと思いながら答えた。
> そしてもう一度「そうです」と言うと、ウェイターは好意的な目で彼を見つめた。
> 「私はここに住んでいる日本人をたくさん知っています。」何を言っているのかわからないトシウリを置き去りにして話し続けた。「皆とてもいい人たちです。とっても働き者で」

このように、日本人が差別される米国と異なり、アルゼンチンでは日

Hosei University Repository

本人であるというだけで肯定的な評価を受けるのである。それは米国南部で激しい人種差別を経験してきたスタールにとって驚きだった。

### 2-3.「ご出身はどちら？」

ここでウェイターが主人公に出自を聞いている点に注目したい。報告者が行ったインタビューで、アルゼンチンへ移住したことについてスタールは以下のように語っている。

> A mí me gustó mucho venir a vivir acá. Muchas veces la gente me preguntaba “¿qué sos?” “¿De dónde sos?”. Pero en Estados Unidos hacer esa pregunta ya es una agresión. Es muy difícil que uno escuche esa pregunta sin que sea una agreción o un niño, inocencia total. Si es un adulto que está hablando, es problemática hacer la pregunta. Pero aquí siempre había como una especie de apertura inesperada de mis partes, porque me crié en una zona y en una época en la que había mucho racismo.[19]
>
> 私はここでの生活をとても気に入りました。ここではよく「出身はどこ？」と聞かれます。でも米国ではこういった質問をするだけで攻撃的だとみなされます。無邪気な子供か悪意からでなければこんな質問をすることはほとんどありません。大人がこんなことを聞こうものなら、問題になるでしょう。でもここには、人種差別が激しかった時代と地域に生まれ育った私にとって想像もしていなかった寛容さがあるのです。

激しい差別を経験してきたスタールにとって、アルゼンチン人が面と向かって「どこの出身ですか？」と聞くことは信じられないことだった。しかもその質問に悪意はなく、純粋に好奇心から聞いているので

Hosei University Repository

ある。米国の留学生としてブエノスアイレスに来たため移民とは立場が違ったことに留意しながらも、アルゼンチンに来て感じた開放感を率直に述べていた。アルゼンチンでは1949年に「移民の日」という祝日（9月4日）が制定されて以来、毎年記念イベントが開かれている。そこでは各エスニック・グループ（colectividad）が伝統衣装をまとい、郷土料理を販売するのである。このようにアルゼンチンでは世代を経ても自分たちが移民の子孫であるという意識を持ち続けている人が多く[20]、それはアルゼンチン人であることと何ら矛盾するものではないのである。そのためスタールが受けたような質問は一般的に交わされるものである。もちろん白人中心社会であるブエノスアイレスにも人種差別は存在するが、公民権運動を経験した南部に生まれ育ったスタールにとって、人種についておおっぴらに語られる事自体が新鮮だったのである。

加えて、アルゼンチンでは日本人が比較的良いイメージを持たれていると言える。これには歴史的背景がある。第二次大戦はアルゼンチンの日系社会にももちろん影響を及ぼしたが、強制収容が行われた米国やペルーと比較すると、日系人が受けた迫害は限定的だったと言える。アルゼンチンが対日宣戦布告を行ったのは1945年3月のことであり、敵国人登録令や邦字紙の発行禁止などの措置が取られたが[21]、半年足らずで終戦を迎えたことや、アルゼンチン政府はもともと中立の立場を守ろうとしていたことなどから、その対応は比較的緩やかなものであった。戦後、親日家のペロンは日系団体をたびたび訪問し、妻エビータのエバ基金を通じて日本へ支援物資も送られた[22]。

米国ではゴールドラッシュの時代に中国系移民が大量に押し寄せ、雇用問題に発展したため「黄禍論」[23]が巻き起こった。つまり、日本人が移住する前からこうした他のアジア系移民に対する差別感情が存在し、日本人移住者はそれを引き継ぐことになってしまったのである。アルゼンチンにはこのような状況はなく、また移住も小規模で日本人

Hosei University Repository

はマイノリティ中のマイノリティであったため、米国のように「黄禍論」が巻き起こるほど、アルゼンチン社会に大きな衝撃を与えなかった。もちろん、差別がなかったなどと言うわけではない。ヨーロッパ系が多数を占めるブエノスアイレスやその近郊では、珍しいアジア人の顔をした二世の子どもたちが差別を受けることも当然あっただろう。しかしあまりにもコミュニティの規模が小さく、カフェ店や洗濯店、花卉業、農業といった特定の職業に就くことが多かったため、アルゼンチン人と仕事の奪い合いになることもなく、社会的、集団的弾圧はほとんど行われなかった。

スタールが小説に描いたアルゼンチン人と日本人のやりとりは、理想化されたものかもしれない。もしこれがアルゼンチンで生まれ育った二世や三世への質問だとしたら、より問題は複雑となる。アジア系の顔をした二世が「自分はアルゼンチン人です」と答えれば、「そうではなくて、もともとはどこから来たのか」という答えが返ってくるだろう[24]。スペイン系やイタリア系と違い、日系はいつまで経っても「日本人」である。それはアルゼンチンでも変わらない。差別や偏見はどこにでも存在する。しかし、長年に渡る排斥運動と強制収容という重い歴史を背負った米国の日系人が一度でもこのような対応を受けたら、それは忘れられないものになるだろう。それがトシウリとアルゼンチンウェイターの間のやりとりに反映されていると考えられる。

### 3. スペイン語による執筆が可能にしたもの

アルゼンチンを気に入り、移住を決意したスタールだが、彼女がブエノスアイレスで感じた開放感は、人種問題からの開放によるものだけではなかった。もともと英語で執筆を行なっていたスタールは、スペイン語の授業でこれまでに書いた短編をスペイン語で書いてみるようにと勧められ、それが創作を行う上で有効だと気づいたと言う。

Hosei University Repository

> Con el castellano, como no tenía tantos recursos, sentí como una especie de liberación. Poder manejarme con pocas palabras, con menos sutileza, hizo que pudiera ver todo más sencillamente. Supongo que podría llegar a escribir en inglés, pero no es lo mismo poder escribir en este idioma porque ya lo tengo asociado con una libertad de movimiento, de la imaginación y con una especie de inocencia perdida, como si pudiera volver a tener una primera inocencia. [25]
> スペイン語で書くとき、それほど知識を持っていないので、ある種の解放感を感じました。少ない語彙と限られた繊細さで書くことによって、すべてがより単純に見えるようになったのです。英語でも同じように書けるようになったとは思いますが、それは今スペイン語で書いているのとは違うと思います。なぜならスペイン語は既に自由な文体と想像力、そして失われてしまった自由な無邪気さと結び付けられていて、まるで子供のころの無邪気さを取り戻したような感じがするからです。

しかし、外国語による執筆が可能にしたのは自由な文体だけではない[26]。外国語の限られた語彙で表現すること、それはまさに移民達が日常的に行なってきたことだった。移住者の多くは新しい言語の習得に苦労した。言語能力に長けた者であっても、四六時中外国語で会話するというのは疲れるものである。しかし、くつろぎの場であるはずの家庭にも、次第に受け入れ社会の言語が浸透してくる。そして現地生まれの二世は、日本語よりも現地の言葉をよくするようになる。これは米国でもアルゼンチンでも言えることで、日本語を母語とする一世と、現地生れで英語、もしくはスペイン語を母語とする二世の間には言語的断絶があった。血の繋がった親子が、共通する母語を持たな

Hosei University Repository

いのである。それでも両者の言語を織り交ぜて意思疎通が図られ、理解し合える場合もあれば、親子の溝を生むことにもなった[27]。

スタールは外国語による制限された執筆を通して、自身が生まれ育った多言語、多文化の環境を再現した。それはネイティブによる校正を経ても彼女が意図的に残す、非ネイティブならではのアクセント（acento）に表象される。ネイティブには多少不自然に聞こえる表現やメタファーは、彼女の文体の特徴であり武器でもある。それによって読者は、移民の間に日常的に起こっていた複数の言語が入り混じったコミュニケーションを体験することができるからである。

しかし、多言語使用だけが相互理解を妨げる原因なのだろうか。母語であれば完璧に互いを理解できるのかといえば、そうではないことを私たちは知っている。同じ言語と文化的背景を持っていても、世代間の価値観の相違や様々な環境によって、親子はすれ違い、時には傷つけ合う。スタールが多言語環境を文体で示すことによって読者に訴えかけているのは、多言語多文化社会における他者理解の可能性ではないだろうか。その証拠に、『一日だけの花』の主人公と母親は、コミュニケーションをとるのにもはや言語を必要としない。母ハナコは幼少期に患った高熱が原因で口をきくことができないという設定なのである。しかし母娘は生け花を通して、またわずかな表情の変化や動作によって、コミュニケーションをとるのである。その根底にあるのは相手に対する愛情と信頼である。スタールは言語が唯一の伝達手段ではないことを示した上で、多文化社会を生きる私達に希望と可能性を投げかけている。

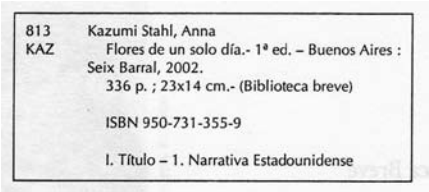
## 4. アルゼンチン文学におけるスタール

スタールはアルゼンチンにおいてどう受け止められているのだろうか。彼女の存在は私たちにアルゼンチン文学とは何かということを考えさせる。『一日だけの花』の初版とペーパーバック版を比べてみると、

Hosei University Repository

面白いことがわかる。初版では「米国小説（Narrativa Estadounidense）」というカテゴリーになっていたのに対し、5年後に出されたペーパーバック版では「アルゼンチン小説（Narrativa argentina）に変わっている（図①、②参照）。2009年に出版されたアンソロジー『東洋への切符』（*Pasaje a Oriente*）には、スタールの作品が収められているが、副題が「アルゼンチン作家による旅行記（Narrativa de viajes de escritores argentinos）」となっている。

アルゼンチン文学の歴史を振り返ってみると、外国生まれの作家や詩人が多いことに気付く。そもそも「アルゼンチン人」とは誰のことだろうか。ある雑誌インタビューでスタールは「選択によるアルゼンチン人（una porteña por adopción y elección）」[28]と紹介されている。彼女は米国における日系二世だが、ブエノスアイレスに移住した、アルゼンチンにおける「日系米国人一世」と考えることも出来るのではないだろうか。ブエノスアイレスに生活の基盤を移してから17年が経ち、スタールの作品は「アルゼンチン文学」として受け入れられるようになってきている。


813 Kazumi Stahl, Anna
KAZ Flores de un solo día.- 1ª ed. – Buenos Aires : Seix Barral, 2002.
336 p. ; 23x14 cm.- (Biblioteca breve)

ISBN 950-731-355-9

I. Título – 1. Narrativa Estadounidense

図①

Kazumi Stahl, Anna
Flores de un solo día.- 1ª ed. – Buenos Aires : Booket, 2007.
384 p. ; 19x13 cm.

ISBN 978-987-580-241-4

1. Narrativa Argentina I. Título
CDD A863

図②

## 5. 変化する名前

もう一度図①と②を見てみると、スタールのカズミというセカンドネームが、苗字とされてしまっていることがわかる。これは日本語名のカズミが名前なのか苗字なのか判断がつかなかった出版社のミスだと考えられるが、このように移民の名前は、しばしば間違えられるも

Hosei University Repository

のである。このことはスタールの作品の重要なテーマの一つとなっている。

名前はアイデンティティの拠り所となりうるものであるが、私たちが考えているほど確固たるものではない。結婚を機に姓が変わることは多くの文化圏で見られる現象であるし、そもそも固有名詞は翻訳不可能なので、個人の名前に込められた思いやその響きを異なる言語で完全に再現することは難しい。英語、ドイツ語、日本語、スペイン語の世界で生活した経験を持つスタールは、他者の名前を認識する過程において起こりうる様々な障壁と、それが名前の持ち主にもたらす影響を意識的に描いている。

処女作『自然災害』に収録された「エキゾチックな女」（*Exótica*）と「ヒロコ」（*Hiroko*）という二つの短編は、いずれも日本から自由意志で米国に嫁いだ女性が主人公となっているが、彼女たちの名前が日本語で聞きなれないものであるために、夫やその家族に間違って発音されたり、表記されたりしてしまう。「エキゾチックな女」の主人公ヨシコ（Yoshiko）は、夫の実家を初めて訪ねる道中、新しい英語の姓をきれいに発音できるように健気に練習を繰り返す。それに対し彼女を迎える夫の家族は、彼女を一個人ではなくエキゾチックな存在としてしか見ることができない。彼女の到着は小さな町のニュースとなったが、「わが町の青年、外国人のエキゾチックな恋人とともに帰郷」[29] と題された新聞記事には、「Yosoki」と表記されている。名前はアイデンティティの根源にかかわるものであり、敬意をもって扱われるべきだが、立場の弱い移民たちは、受け入れ側の言語に歩み寄らなければならなかった。短編は想像とは大きく異なる米国社会にヨシコが落胆する場面で終わっているが、彼女が抗議したり訂正したりする場面は描かれていない。おそらくヨシコはこの後「Yoshiko」として英語の世界で生きていくのだろう。たとえ間違いが訂正されたとしても、日本語を勉強したことのない夫の家族が「ヨシコ」と正しく発

Hosei University Repository

音することは難しいだろう[30]。

同じ人間がある日を境に「ヨシコ・フルサト」から「Yoshiko Rutherford」となってしまう。小さな変化だが、本人のアイデンティティにも影響しかねない、重要な変化である。このように、移民たちの多くは彼らを取り巻く環境の変化だけでなく、自身の名前の変化にも適応しなければならなかったのである。このような間違いが実際の名前に取って代わる場合もあれば、移民自身が、受け入れ社会の人間に発音されやすいように変えてしまうことも、歴史上行われてきた。田中克彦は移民たちが米国に到着した際発音しやすいように名前が変えられてしまったことについて、「名前の改変はそこの社会と文化への忠誠心を示すものであり、また多数決民主主義原理の顕著な表現である。もともと言語は、この原理に最も服しやすいものだからである。」[31]と述べているが、ヨシコにとっても、不自然に発音された新しい名前を受け入れることは、相手の言語で生きていく覚悟にもつながるだろう。

スタールは私たちが普段いかに外国人の名前に対して無頓着であるかを批判的に描くと同時に、移民たちが名前の改変という重大な環境の変化にもたくましく適応していった様子を描いてもいる。8歳でブエノスアイレスに移住した『一日だけの花』の主人公エメに起こった変化を以下のように描いている。

> Pero promovió a su vez el giro de 180 grados en la vida de las dos, por el que cada detalle familiar fue reemplazado por otro distinto, hasta la pronunciación de sus nombres. Con el tiempo sus cuerpos también cambiaron y llegaron a ser más parte del nuevo lugar que del original, de donde habían venido.[32]
>
> しかしそれは二人の人生を180度変え、馴染みのあった事柄すべてが新しいものと入れ替わり、名前の発音まで変わってしまった。

Hosei University Repository

時間が経つにつれ体にまで変化が起こり、元いた所よりも新しい場所の一部になるに至ったのだ。

幼いエメにとっても、名前の変容は彼女の人生を大きく変える重要な出来事ものだった。しかし、新しい名前もまた、彼女の新しいアイデンティティの一部となっていくのである。『一日だけの花』はエメが過去を取り戻す旅に出るという物語だが、エメが過去の記憶と共に取り戻したのは以前の「名前」であり、彼女は古い名前も新しい名前も受け入れる。このことは、スタールがアイデンティティを固定化された唯一絶対のものではなく、時間や環境の変化とともに付け加えられ変化していく「重層的」なものであると考えていることを示している。

著者のスタール自身も、英語、ドイツ語、日本語から成る複雑な名前を持っている。Anna は英語ではアンナだが、スペイン語ではアナとなる。Stahl はドイツ語ではシュタルだが、アルゼンチンで生活する今、スタールと発音されることが多い。本稿では本人の希望を尊重してアンナ＝カズミ・スタールとしたが、彼女の母親もカタカナ表記を決める際に頭を悩ませていたと言う。彼女自身も、所変われば、もしくは言葉変われば名前変わるとでも言うべき、複雑な名前を持っているといえる。多言語の名前を持つことは、時として混乱を招く。彼女がドイツに留学した際、アジア人の顔をしているためにシュタル（スタールのドイツ語読み）と名乗っても信じてもらえなかったという。彼女の名前が容姿と一致しないとみなされ、アイデンティティを否定されてしまったのである。

しかし現在ブエノスアイレスで生活する上で、この多言語の名前は彼女のその多彩な活動の役に立っているのではないだろうか。アルゼンチン人とも思えるアンナ、日系二世として日本文学を教えるカズミ、そして日本のエキゾチシズムを求める読者からの隠れ蓑となるスタール。『一日だけの花』の表紙を見ればわかるように、日本文学作品の

Hosei University Repository

翻訳作品にありがちな日本庭園や着物の女性の写真ではなく、抽象的な花の絵が使用されており、日本らしさは感じられない（図③、④参照）。アンナ＝カズミ・スタールという著者名を見た読者は、外国姓が一般的なアルゼンチンにおいて、著者のバックグラウンドを予想することができるだろうか。

図③初版（2002 年）

図④ペーパーバック版（2007 年）

## 6.「他者のまなざし」に揺れるアイデンティティ

スタールは筆者が行ったインタビューで人が社会においてさらされる「他者のまなざし（la mirada del otro）」と、それがアイデンティティに与える影響について語っている。スタールによれば、70 年代まで日系人は米国社会の最下層に位置づけられていたが、日本の経済発展とともに日系人に対する見方が変わったという。決して主要社会に受け入れられたわけではなく、人々の差別意識は消えなかったが、日本製品の流通によって「日本」のイメージが変わった結果、被差別階級の中でわずかにその地位が上昇したのだと言う。それは自分たちに起こった変化ではなく、「他者のまなざし」における変化であった。

絶対的な価値観などほとんど存在しない。自分は自分で在り続けているつもりでも、周囲の認識が変化し、それによっていつのまにか自

Hosei University Repository

分も変化してしまっているということは、決して珍しくない。スタールが移民たちの揺らぐ名前で表現しているのは、社会が個人に与えうる影響と、その結果形成され常に変化するアイデンティティの問題なのである。これは移民に限らず誰にでも起こりうることであり、グローバル社会を生きる私たちに「自分」と「他者」との関係を再認識させてくれる。しかしエメが過去の自分と現在の自分を両方受け入れたように、スタールはアイデンティティの決定において私たちに選択の可能性があることを示している。スタール自身が「選択によるアルゼンチン人」となったように。

スタールの作品と半生を通して、個人のアイデンティティと社会の関係を考えてきた。米国、ドイツ、日本、アルゼンチンを越境し、多言語、多文化を生きてきた彼女は、日系社会というエスニック・マイノリティを描きながら、日系人が抱えるアイデンティティの問題を普遍化し、言語とコミュニケーションの問題を私達に投げかける。「ご出身はどちらですか？」と聞くことが良いことかどうかわからない。しかしこの問に対して「私は米国人であり日本人でありドイツ人でありアルゼンチン人です」[33]と答える人がいても、驚かない見識の広さを持ちたい。誰もがスタールのような重層的アイデンティティを持ちうると考えるからである。

本稿は2012年6月中部大学にて行われた日本ラテンアメリカ学会第33回定期大会における口頭発表用原稿を加筆修正したものである。

本研究は、独立行政法人日本学術振興会の「組織的若手研究者等海外派遣プログラム」による支援を得た。また現地での調査にご協力いただいた川村湊教授、守屋貴嗣氏、金煥基氏、久田アレハンドロ氏、そしてインタビューを受けてくださったスタール氏にこの場を借りて感謝の意を表したい。

Hosei University Repository

## 参考文献

Stahl, Anna-Kazumi. *Catástrofes Naturales*. Buenos Aires: Sudamericana, 1997.

——. The《Issei》in America During W.W. Ⅱ : A Study of Kogawa' s Obasan [Nikkei Imin No Kokoro]『神戸山手女子短期大学環境文化研究所紀要』（神戸山手女子短期大学）2（1998）、35-44.

——. *Flores de un solo día*. Buenos Aires: Seix Barral, 2002.

——. "La pertinencia de una llave extraña" María Sonia Cristoff ed., *Pasaje a Oriente: Narrativa de viajes de escritores argentinos*. Buenos Aires: Fondo de Cultura Económica, 2009. 183-199.

——. "Primeros días porteños" *Buenos Aires: La ciudad como un pleno. Crónicas y relatos*. By Arnaldo Calveyra, María Carman, Sergio Chejfec, Marcelo Cohen, Edgardo Cozarinsky, María Sonia Cristoff, Daniel Guebel, Sylvia Molloy, Dalfa Oken, Alan, Pauls, Martín Rejtman, Graciela Speranza & Anna Kazumi Stahl. Buenos Aires: La Bestia Equilátera, 2010. 203-232.

Maehama, Federico. "Entrevista a la escritora Anna Kazumi Stahl: Sobre la comunicación sin palabras, la diversidad de culturas, y la identidad" La Plata Hochi. jueves 9 de enero de 2003. p4.

María Eugenia Ludueña, "Anna Kazumi Stahl, elegí vivir en buenos aires" en revista *Sophia*, No. 40, junio 2004. 22-25.

アジア系アメリカ文学研究会編、『アジア系アメリカ文学―記憶と創造―』大阪教育図書、2001

アルゼンチン日本人移民史編纂委員会、『アルゼンチン日本人移民史 第一巻戦前編、第二巻戦後編』、社団法人在亜日系団体連合会（FANA）、2002

粂井輝子『外国人をめぐる社会史　近代アメリカと日本人移民』、雄山閣、1995

坂口博一「日系アメリカ人文学に現れたアイデンティティの問題――ジョン・オカダとモニカ・ソネとヨシコ・ウチダの作品から――」『早稲田人文自然科学研究』（早稲田大学社会科学部学会）29（1986）、1-14.

島田法子編著『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道　女性移民史の発掘』、明石書店、2009

ハンチントン、サミュエル著、鈴木主税訳、『分断されるアメリカ』、集英社、2004

Hosei University Repository

〔注〕

1 米国における日系文学は中国系などの他のアジア系作家との連携によって誕生したため「アジア系アメリカ文学」の中に含まれることも多い。アルゼンチンでは中国系及び韓国系の移住の歴史が浅いためか、現在までそのような他のエスニック・グループとの連携は見られない。

2 ここではアメリカ合衆国およびカナダを指し、メキシコは含まない。

3 小林富久子「移動・越境・混血―最近の日系女性作家たち」、アジア系アメリカ文学研究会編、『アジア系アメリカ文学―記憶と創造―』大阪教育図書、2001、441-443 頁。

4 アルゼンチンにおける日本語文学については守屋貴嗣「アルゼンチン日本語文学論――『巴茶媽媽 (パチャママ) 巴茶媽媽』について――」『異文化　論文編』（法政大学国際文化学部）13（2012)、221-243 頁を参照。

5 ハンチントン、サミュエル著、鈴木主税訳、『分断されるアメリカ』、集英社、2004、64-74 頁。

6 主人公エメは白人男性と日本人女性の間に生まれ、8 歳までをニューオーリンズで過ごし、その後ブエノスアイレスに移住したという設定になっている。

7 Stahl, Anna-Kazumi. *Flores de un solo día*. Buenos Aires: Seix Barral, 2002. p157

8 以下、本稿で引用するスペイン語作品及びインタビューの和訳はすべて筆者による。

9 報告者がスタールに対して行ったインタビュー（2011 年 11 月 2 日）より。

10 山根和代、「第二次世界大戦と日系二世の文学」、アジア系アメリカ文学研究会編、『アジア系アメリカ文学―記憶と創造―』大阪教育図書、2001

11 1943 年米国政府は収容所内の日系人に対して「忠誠登録」を行った。この質問によって引き裂かれた日系社会の様子を描いた代表的な作品としてジョン・オカダの小説『ノー・ノー・ボーイ』が挙げられる。

12 坂口博一「日系アメリカ人文学に現れたアイデンティティの問題――ジョン・オカダとモニカ・ソネとヨシコ・ウチダの作品から――」『早稲田人文自然科学研究』（早稲田大学社会科学部学会）29（1986)、1-2 頁。

13 安富成良「アメリカの戦争花嫁へのまなざし　創出される表象をめぐって」、島田法子編著『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道　女性移民史の発掘』、明石書店、2009、163 頁。スタールは短編集『自然災害』で戦争花嫁の主人公を登場させているが、彼女たちは教養があり自由意思で米国に嫁いできたことが強調されており、戦争花嫁に対するステレオタイプを打ち破る意図があっ

Hosei University Repository

たと考えられる。

14 Stahl. “Primeros días porteños” *Buenos Aires: La ciudad como un pleno. Crónicas y relatos*. By Arnaldo Calveyra, María Carman, Sergio Chejfec, Marcelo Cohen, Edgardo Cozarinsky, María Sonia Cristoff, Daniel Guebel, Sylvia Molloy, Dalfa Oken, Alan, Pauls, Martín Rejtman, Graciela Speranza & Anna Kazumi Stahl. Buenos Aires: La Bestia Equilátera, 2010. pp204-205.

15 Stahl. *Flores de un solo día*, p83.

16 Ibid., p43.

17 トシウリ（Toshiuri）というのは奇妙な名前だが、筆者が行ったインタビューでスタールは意図的にこの名前を選んだと語っている。日本語を知らないアルゼンチン人にとってみれば、いかにも日本人らしい名前であり、それが実際には存在しない名前だとは気づかない。5 章で述べるように移民の名前はしばしば間違えられるものだということを、皮肉を込めて描いている。

18 Stahl. *Catástrofes Naturales*. Buenos Aires: Sudamericana, 1997. pp203-204.

19 同註 7 インタビューより。

20 ハンチントン、同頁を参照。米国も同じく「移民の国」と呼ばれることが多いが、ハンチントンは「移民」と「入植者（セトラー）」を明確に区別して「移民の国」という神話に疑問を投げかけている。米国のナショナル・アイデンティティは「入植者」たちが持ち込んだ文化にもとづくものであり、後から来た「移民」たちはそれに同化しなければならなかったと主張している。

21 アルゼンチン日本人移民史編纂委員会、『アルゼンチン日本人移民史 第一巻 戦前編』、309 頁。

22 アルゼンチン日本人移民史編纂委員会、『アルゼンチン日本人移民史 第二巻 戦後編』、99 頁。

23 「黄禍論」及び排日運動については粂井輝子『外国人をめぐる社会史　近代アメリカと日本人移民』、雄山閣、1995 年を参照。

24 アドリアナ・シマブクロとモニカ・ヒガは日系アルゼンチン人が出自を聞かれた場合、質問者の多くは「アルゼンチン」という答えに納得せず、両親や祖父母の出自を聞きたがるということをタクシー・ドライバーとの会話を再現して述べている。このように、ブエノスアイレスにおいて出自を聞くことはタブーとは言えないが、それを快く思わない人も当然いるだろう。（アドリアナ・シマブクロ、モニカ・ヒガ「アルゼンチンにおけるアジア系の諸コミュニティ」『アジア遊学　No.76　特集アジア＜日本・日系＞ラテンアメリカ――日系社会の経験から学ぶ』、勉誠出版、2005、163 頁）

Hosei University Repository

[25] Maehama, Federico. “Entrevista a la escritora Anna Kazumi Stahl: Sobre la comunicación sin palabras, la diversidad de culturas, y la identidad” La Plata Hochi. jueves 9 de enero de 2003. p4.

[26] スタールの文体におけるもう一つの特徴として、アルゼンチン特有のスペイン語（ラプラタ方言）が用いられていることが挙げられる。他のスペイン語圏ではあまり使用されない voseo（「tú ＝君」に代わって vos が用いられ、動詞の活用も異なる）やブエノスアイレスならではの単語、表現が見られる。

[27] 冒頭で紹介した小林の論文にもあるように、こうした世代間の断絶は日系文学で繰り返し描かれてきたテーマの一つである。

[28] María Eugenia Ludueña, “Anna Kazumi Stahl, elegí vivir en buenos aires” en revista Sophia, No. 40, junio 2004. p22. “porteña” は正確には「ブエノスアイレス出身の」という意味だが、ここではアルゼンチン人と訳した。

[29] Stahl, *Catástrofes Naturales*. p27.

[30] この短編の舞台は米国であり、スペイン語で書かれた会話は英語で行われていると考えられるが、アルゼンチンの読者にとってもヨシコの名前の発音は難しいだろう。アルゼンチンのスペイン語では「yo」は「ジョ／ショ」に近く、「ヨシコ」と発音されることはほとんどない。

[31] 田中克彦『名前と人間』、岩波書店、1996、108 頁。

[32] Stahl. *Flores de un solo día*, p49.

[33] これは筆者による例に過ぎず、スタール自身の言葉ではない。